

みかん果汁の 現状と今後の見通し

日本果汁協会
星 晴 夫

1. 生産状況

わが国でみかん果汁が本格的に生産されるようになったのは、昭和28年頃からであるが、その後漸次増加の一途をたどったものの、40年から43年までの生産量は1/5濃縮果汁にして2,000~3,000トン台、原料処理量で3万~5万トン程度であったが、44年以降は、みかんの生産増大にともなって急激な増加傾向を示し、とくに47年果汁生産は2万5,000トン(処理量30万5,000トン)と、5前年の

また、みかんの生産量に対する加工比率についてめると、43年の生産量に対して缶詰向けは10.8%、果汁向けは僅か2.6%にすぎなかったが、48年は缶詰向けが8.6%、果汁向けが10.6%と、従来みかんの加工需要は缶詰が中心であったものが、果汁がこれにかわりつつあるといえよう。

(2) 45年までのかんきつ関係の搾汁工場(濃縮設備を有する工場)は、農協資本および民間資本あわせて11工場で、その他あわせて原料処理能力は5万~6万トン程度であったが、前述のとおり、みかんの増産にともなう加工需要の拡大をはかるため、農林省は果実加工需要緊急対策事業を打出し、農協系大型果汁工場の建設に対する助成措置を講じたことにより、46年4工場、47年度3工場が新設され生産能力は飛躍的に増大した。

48年度は新設工場の生産体制が軌道にのったこ

表 1 みかんの生産量および用途別消費量 単位:トン

項目 年次	生産量	生 食	輸 出	加 工				果汁生産量 (1/5濃縮)
				缶 詰	ジャム	果 汁	計	
43	2,352,000	2,050,900	23,823	222,300	1,300	53,600	277,200	2,776
44	2,038,000	1,703,100	23,250	238,500	1,300	71,800	311,600	4,714
45	2,552,000	2,186,800	24,795	246,100	1,350	93,000	340,450	7,507
46	2,488,000	2,136,900	25,851	183,000	970	142,300	326,270	11,477
47	3,568,000	2,947,000	21,719	293,400	760	305,000	599,160	25,412
48	3,389,000	2,705,000	24,000	295,000	...	363,000	658,000	34,700

資料:49年度農業観測(農林省)、48年は推定

43年生産量の10倍近くの大巾な伸びとなり、また48年はみかんの生産が前年を下回ったにもかかわらず3万4,000トン、前年対比で30%増加となった。

このように生産が急激に増加している主な要因としては、次のことが上げられよう。

(1) 本来、みかんの需要は生食が中心で、43年頃までは一応生食市場の需給関係が安定し、加工向けみかんの供給量には限度があった。とくに果汁向けについては、生食・缶詰向けに不適格なものが供給されるなど、不安定な実情にあったが、45年以降みかんの生産が急増するにつれ、生食市場への供給過剰傾向から果汁向けの供給量が増加した。

すなわち、43年の果汁向け供給量は5万3,600トンであったが、46年以降は表1のとおり大巾な増加を続け、48年は約36万トンに達している。

ともあって、農協工場だけで32万6,000トンのみかんを処理したが、要するに、果汁向の供給量に対応できる生産体制が一応整備されたことが、みかん果汁の生産増大を促したといえよう。

2. 需給状況

前述のとおり果汁の生産増大にともない、このところ天然果汁、果汁飲料、果肉飲料(ネクター)等の果汁を主とし、果汁製品の生産が大巾に伸びている。(表2)

わが国のかんきつ果実飲料は、従来、原料果汁の供給力に乏しい等の事情により、果汁含有率の低い清涼飲料的な果実飲料が主体であったが、46年以降の果汁の生産増大にともなう供給事情の好転により、天然果汁・果汁飲料等、果汁含有率の高い果汁製品を取上げようとする動きが活発化している。

すなわち、かんきつ果実飲料の日本農林規格格

付実績(表2)でみると、直接果実飲料の場合、44年度では、天然果汁(果汁分100%)、果汁飲料・(果汁50%)および果肉飲料(ピューレー分50%)は全体の9%で、91%が果汁分10~30%程度の果汁入り清涼飲料となっていたが、48年度には前述の事情から、全体の34%が果汁を主体とした果汁製品で、その比率が高く、わが国の果実飲料の品質変化が顕著となっている。

これを区分別についてみると、天然果汁は44年度には僅か2,680klにすぎなかったが、その後順調に伸び、48年度4万700klと前年度の3倍近い大巾な増産となっている。

果汁飲料は47年度までは、雪印乳業が紙容器の製品を生産していた程度であったが、48年度にコカコーラが果汁飲料を本格的に取上げたこともあって、生産量は47年度の約1,400klから一挙に3万kl近くに達した。

表2 かんきつ果実飲料の日本規格格付実績

年次	直接飲用果実飲料				き 釈 用 果実飲料
	天然果汁	果汁・果肉飲料	果汁入り清涼飲料	計	
44	2,680	9,527	117,379	129,586	4,390
45	5,952	8,782	117,343	132,077	7,154
46	8,099	8,417	117,065	133,581	18,986
47	13,956	11,128	132,188	157,272	14,558
48	40,650	45,237	165,833	251,720	16,661

日本果汁協会調 単位:kl

果肉飲料は47年度までは伸び率はや緩慢であったが、48年度はレジャー需要が旺盛であったことから前年対比で60%増加した。

また果汁入り清涼飲料は炭酸飲料などの清涼飲料との競合関係にあるため、生産は微増に止まっていたが、48年度は需要シーズン中好天に恵まれ前年対比26%増加となり、とく缶詰がレジャー需要の関係で約2倍の大巾伸びとなった。

本年度は前述のとおり、48年産みかん果汁の生産量は約3万5,000トンと前年産対比30%増加し、かつ前年の消費が順調であったことから、本年前期の生産意欲は旺盛で、日本果汁協会がまとめた本年1月~6月までのJAS格付実績では、き釈用果実飲料は前年並みであるが、直接飲用果実飲料は全体として前年同期対比で約30%増加となっている。

とくに天然果汁は前年同期の2倍以上と、前年に引続いて大巾に増加しており、また果汁飲料

も、前年のコカコーラに次いで本年度はカルピス食品工業、森永製菓、武田食品工業およびサントリー等、果実飲料関係の有力ブランドが取上げたこともあって、生産は著るしく急増している。

原料用としてのみかん果汁の需要は従来、果汁入り清涼飲料が主体であったが、最近年は果汁を主体とした天然果汁・果汁飲料にウェイトが移っている。

すなわち、44年度のみかん果汁の需要割合は果汁入り清涼飲料関係の68%に対し、天然果汁等は32%となっていたが、48年度には前者が39%、後者が61%と需要割合が逆転している。

これは、すでに述べたように、果汁の急激な増大に対する需要拡大策の結果といえるが、今後も必然的に果汁を主体とした果汁製品への需要を、伸ばさざるをえない状況にあるといえよう。

3. 見 通 し

今後の見通しであるが、本年度みかんの生産は農林省の公表によると、史上最高の生産となった47年産をさらに大巾に上回る見込みと予想している。このため生産過剰による市況暴落を懸念し摘果が行われているが、400万トン近い生産量が予想されており、このまま推移すると、現状の生食需要の関係からみて、かなりの量を加工向けに回さざるをえないものとみられている。

このような背景から、みかん産地の農協では、あらたに政府助成による果汁工場の新設・増設をすすめている。その工場数は12工場で、本年度中に完成、稼動する予定であるが、これによって原料処理能力は12万トン以上増加する。

このほど農林省がまとめた49年度の農協・民間資本果汁工場の原料みかんの処理計画量は約54万トンとなっており、1/5濃縮果汁で5万トン前後となり、前年実績の50%増加ということになる。

みかん果汁の需要量は47年産が約2万5000トン、48年産は本年度下期の需要状況如何によるが、3万トン前後と見込まれる。従って現状の需要状況からみて大巾な過剰生産となるが、これをどう消化するかが当面の重要な課題といえる。いずれにしても、みかんの生産調整策が論議されているが、生産能力の向上によって必然的に果汁の生産量が増加するが、これに対する積極的な消費拡大策の具体化が望まれよう。